

トルコギキョウ切り花におけるSTSの効果

1. はじめに

ここ数年前から暖地でのトルコギキョウの2度切り栽培が開発されて、産地間競争が激しくなっています。そのため、鮮度保持についても、カーネーション等で使われているSTS（硝酸銀とチオ硫酸ナトリウムの混合物）が利用され始めています。ここでは、そのSTSの効果について検討し、産地としての効果的な利用方法について考えてみます。

2. 冬季及び夏季の効果の差

所内で栽培されたトルコギキョウ‘あずまの桜’及び‘キングオブスノー’を冬季（12月6日）及び夏季（6月12日）にSTS処理して花持ち延長効果について検討した結果が図1です。

処理方法としては3輪開花の状態の切り花を50cmに調整して、10℃冷蔵庫内で0.2mMの濃度のSTS処理を24時間行いました。その後、段ボール箱内に24時間静置して花ピンに生けました。生け花環境は、冬季はエアコンで温度23℃±1℃、相対湿度40～60%、500lux24時間照明で、夏季は常温で温度23℃～28℃、相対湿度65～95%、500lux24時間照明としました。

図1に示すとおり、冬季、夏季では効果の度合いには若干差が認められますが、いずれの時期においてもSTS処理により花の萎凋日は延長されました。

3. 濃度について

試験に供試したSTS溶液は、K-20C（甲東社製）であり、表中の2.0mMは100倍希釈液、0.4mMは500倍希釈液、0.2mMは1,000倍希釈液です。試験は冬季に行い、処理方法については、前述の季節間差の試験と同様の方法で行いました。

表1で示すとおり、いずれの濃度においてもSTS処理により花の萎凋日は延長されました。また、‘キングオブスノー’では、濃度が濃いほど効果が高くなりました。

4. おわりに

STSの効果については、十分に鮮度保持効果を期待できることがわかりました。上記試験以外に、数品種を用いた品種間差についても検討しましたが、いずれの品種でもSTS処理により花持ち延長効果が認められました。産地でのSTS利用については、コストとの兼ね合いもありますが、全収穫期間での利用が望ましく、処理方法としては、10℃程度の冷蔵庫で処理する場合は、500倍希釈（K-20Cの場合）で行うことが望ましいと考えられました。（園芸部 上山茂文）

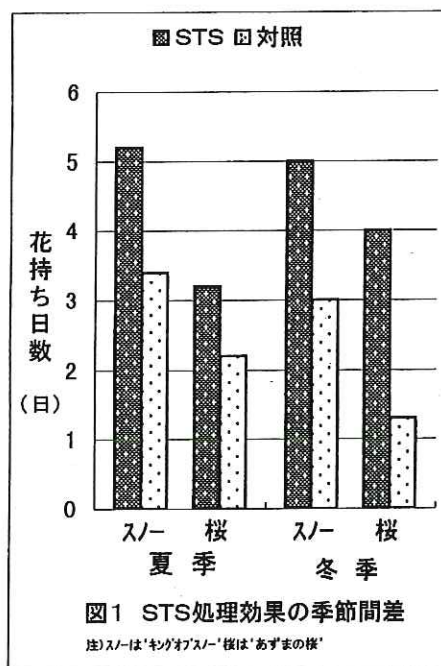


表1 トルコギキョウ切り花でのSTS処理濃度の違いが花持ち延長に及ぼす影響

供試品種	STS処理濃度	花萎凋日 (日)
あずまの桜	2.0mM	4.0
	0.4	4.0
	0.2	4.0
	0	1.3
	0	1.3
キングオブスノー	2.0	8.5
	0.4	8.0
	0.2	5.0
	0	3.0
	0	3.0

注) 切り花は3輪開花したものを供試、生け花環境は温度23℃±1℃、相対湿度40～60%、500lux24時間照明、12月6日から試験開始、STSは、K-20C（甲東社製）を使用